

三)の皇女佳子内親王の心的不調と平癒を語る伝承が残されている。

佳子内親王は十八歳のころより、「御心地常ならず在まし」。丈なる御髪を乱して、ただ帷の中に隠れていた。そうしたとき岩倉の大雲寺の十一面観音と閼伽井の水がこうした病に効くと聞き、参籠したところ平癒した。

ただしこの伝承を記す「御香水由来記」は江戸時代後期の作とされ、他に類話を載せた史料はない。それゆえ、大雲寺にて心的不調者の治療が開始された後に創作されたものと思われる（橋本明『治療の場所と精神医療史』日本評論社、二〇一〇年）。だが後三条天皇は藤原氏を外祖父とせず、さらに次の代の白河帝が退位後に院政を始めたという点において、宮子と佳子は藤原氏繁栄の起点と終点に位置する女性という関係にある。

しかし大雲寺の治療場としてより興味深いのは、他の湯治や瀧行そして読経などからなる他の類似施設のほとんどが、付添人を前提としていたのに対して、岩倉の地では付き添い人なしで受け容れていたことである。すなわち病人の家族が一定の「治療費」を払うと、岩倉の茶屋に雇われた「介抱人」と呼ばれる存在が病人を自宅に預かり、瀧病などの治療をおこなうというシステムが出来上がっていたことである。

つとに知られているように、日本の精神医学の礎を築いた呉秀三（一八六五—一九三三）は、一八九五年に刊行した『精神病学集要（後編）』において、精神しょうがい者の「家庭的看護」の事例として岩倉を、ベルギーのゲールと並ぶものと評価した。ゲールはベルギー北部にあり、精神しょうがい者を町ぐ

るみで受け容れたことで知られる地である。民家に宿泊しながら、教会へ通って治療の儀式を受けるという形である。

もちろん全てがゲール、岩倉のいずれにせよ、美名のみで評価できないことは確かである。実際のところ岩倉においては、参籠者を拘束する器具が残されているなど、「家庭的看護」という美名から外れる点も多々ある。

しかし福祉の領域において大規模施設から小規模地域密着型施設への移行がおこなわれている現在、地域における精神しょうが者の受け容れに関して、岩倉はさまざまな示唆をもたらしていると思われる。

なお本発表は、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「うつ病者の社会的支援」および「自殺予防」に関するソーシャルモデル研究・開発の一環である。

幻聴と宗教

大宮司 信

一般に、また素朴に、幻覚は「対象なき知覚」といわれる。精神医学ではその重要さの程度から、単なる物音や音楽とことなり、人間の声が内容となる幻聴が研究の中心となり、これを「幻声」とよぶ。幻覚は語義や歴史からは「思い違い、とりとめのないこと」をいい、錯覚や幻想などとも判然と区別しがたい内容であったことが予測されるが、現在この方面に取り組む場合、まずは、上述した幻声が発点となる。

宗教、特に我が国における開教や信仰復興の際の心的体験として、幻視（見神体験）、神がかり（憑依状態）と並んで、神・

仏の声をきくという体験(幻声)はよく知られている。しかし、一般に紹介されているそうした体験は、精神医学の臨床における記述に比べ、かなり漠然としている。教団自体から発信されている文書によっても、この点はあまりはつきりしない。これにはもちろん教祖・教団にとって最も神聖かつ秘すべきことがらである点も関係している。

いずれにしても宗教の中における幻声の働きは、本人に安堵を与えるほか、宗教の成立自体にも関与し、それまでの宗教的な体験を新しく問い直したり体験しなおしたりするといった、意義とおりの意味での画期的かつ積極的な体験となる。

一方、精神障害、とりわけ統合失調症においては、体験する病者にとって幻声は単にないはずの音が聞こえるといったなまやさしい現象ではない。幻声が「聞こえる」という表現は、もちろん聴覚的な知覚現象であることにまちがいないが、自らが好んで聞くのではなく、耳を塞ぎ聞きたくない強い嫌悪感があるのに、それに反して「聞かせられる」体験であり、しかも自己の考えや行動を制約し、いいように病者をあやつる。これが病気としての幻声の特徴である。

関根義夫は豊富な統合失調症の幻声の代表的な症例記述に加えて、このような幻声の特徴に対して控えめであるが、「実体的被侵襲感」という言葉を与えている。本論考では、体験者の視点より、むしろ幻声の特徴にふまえて「自己への侵襲性」という言葉を仮に与えておきたい。

統合失調症を中心とする精神疾患にみられる幻声と同じように、宗教的体験としての幻声も、外からの声として、例えば

「神の声として聞いた」といったかたちで記載されているものが多いが、上述したように、その実態はあまりはつきりしない。記述上の例えや表現であつたりする可能性も否定できない。しかし一般に、実際に外界からの声として知覚的に捉えられた幻声(真性幻声)ではなく、内界の表象の中で聞こえてきたと感じる幻声(仮性幻声)の可能性が、宗教の中の幻声の記載には多いように筆者は感じている。

このような幻声の形式上の相違が可能性としてあるが、より重要な相違は先に述べた「自己への侵襲性」という仮に定めた述語にあらわされる部分ではないだろうか。この点が両者を分ける違いと思う。宗教における幻声は精神の病における幻声のように、自己への侵襲的な声として聞こえ、脅かされ、さらには行動が取れなくなってくるようなものではない。精神の病に見られる幻声はそうした幻声を遙かに超える強い力を持ち、そして自己に対して侵襲的である。逆に自己侵襲的ではないが、あくまで非日常的事であること(幻声の場合、「ないはずの声」が聞こえること)が、新しい境地を切り開くという意味合いにおいて宗教の一部に意味をもっていると考える。

マインドフルネスと依存症のケア

——Brazierの思想と実践——

葛西 賢太

『仏教心理学キーワード事典』の未完の課題である現代的な動向を踏まえるために、仏教心理学の担い手たちの実践と思想について検討する。